



信州大学 経済学部同窓会報

第 10 号

発行者 信州大学経済学部同窓会
同窓会事務局 〒390-8621
長野県松本市旭3-1-1
信州大学経済学部内
TEL・FAX 0263-37-2309

平成22年11月15日発行

E-mail : k-doso@shinshu-u.ac.jp
URL : http://www.econ.shinshu-u.ac.jp/index.html

第十号の紙面より

- 会長あいさつ 矢口晋司
- 独立法人化以降の大学と
経済学部の課題 徳井丞次
- 離学愛別の辞 渡邊 裕
- 同窓会理事会報告
- 同窓会総会報告
- 卒業生による講義-平成22年度
現代の産業・社会事情 古澤栄一

- 連載 ゼミ「今」
-後輩達のゼミ紹介- 村上ゼミ
古澤ゼミ
- 会員のたより
伊東信行 (1970年入学)
高木保夫 (1977年入学)
笠井雅人 (1980年入学)

- 小堀晋一 (1986年入学)
- 田中賢太郎 (1988年入学)
- 市川洋平 (1995年入学)
- 文理学部卒業生からのたより
青木 功 (1963年卒業)
- 東京同窓会案内
- 広報誌『信大NOW』のご案内
- 編集後記

会長あいさつ

同窓会長 矢口 晋司
(1978年入学)

信州大学経済学部同窓会員の皆様におかれましては、各分野で広く活躍のこととお喜び申し上げます。平素より、母校の発展ならびに同窓会活動に対し何かと関心を頂きありがとうございます。

さて私、本年五月二十二日に開催されました総会におきまして、同窓会会長に再任を頂き、この先二年間重責にあたらせて頂くこととなりました。すでに三期六年間在職し、会員の皆様方の期待に添えるような同窓会活動を展開できない状況を反省する中で、会長職を退き、新たな執行体制のもと、新時代に適した同窓会活動を展開すべき時期に来ているのではないかとこの考えもあつたわけですが、平成二十四年三月十九日に設立三十周年を迎える、わが経済学部同窓会に、設立から関わってきた立場から、なんととしても設立三十周年記念行事を会員皆様方の協力を頂く中で、成功裏に実施したいとの思いから、会長職を引き続き受けさせて頂くことにいたしました。はなはだ微力ではありますが、何卒よろしく願います。

設立三十周年記念行事については、本年一月開催の理事会より検

討を開始させて頂きましたが、会員の皆様方の協力、特に記念行事への多くの同窓会参加無くして成功は望めない、との意見が多数を占めました。そこで本年度より幹事の皆様方にお集まり頂き、記念行事の在り方、参加者を如何に集めるか、といった事を話し合っ

て頂くとともに、今後の同窓会活動の在り方、経済学部との連携、大学に対する協力体制の持ち方等の意見をお出し頂き、幹事会を年に二回程度、松本と東京で開催してまいりたいと考えております。

これまでも、各卒業年次より二名幹事を選出させて頂き、委嘱しておりましたが、執行部の不手際から幹事会を開催せずに今日に至ってしまいました。この点を深く反省するとともに、幹事の皆様方のご意見を集約させて頂き、それを基に理事会において検討を深め、同窓会活動の活性化へとつなげていければと考えておりますので、何卒ご理解とご協力をお願いいたします。

さて、この場をお借りして、再三再四お願い申し上げております、終身会費納入に関しまして、ご報告ならびにご確認をお願いいたします。平成十九年十一月の総会において、終身会費一万円徴収を決定頂き、文書にて、会員の皆様方

に終身会費一万円の納入をご依頼申し上げたところ、趣旨をご理解頂き、八月末現在で九三八名の皆様方よりお振込みを頂きました。

この場をお借りして深く御礼申し上げます。しかしながら、私どもの説明不足が原因で、まだ多くの会員の皆様方に終身会費徴収の趣旨をご理解頂くことができず、お振込み手続きを完了して頂けない状況となっております。皆様方もご承知の通り、国立大学独立行政法人化以降、大学を取り巻く情勢は非常に厳しい状況となっており、経済学部も削減された研究費の中で成果を期待されるという極めて厳しい環境となっております。同窓会としても学部における学術研究並びに地域連携等に対し、資金面も含め支援体制を検討していく必要性を強く感じているものの、同窓会も大変厳しい財政状況にあり、具体的な支援検討を進められない状況となっております。同窓会全員の皆様方の深いご理解を頂く中で、この難局を打破していきたいと考えておりますこと、この場をお借りし、終身会費の納入を再度お願い申し上げます。

同窓会員の皆様方の一層のご活躍をご祈念申し上げますと共に、同窓会もより一層発展、成長して行くことを祈念し、会長あいさつとさせて頂きます。

法人化以降の大学と学部の課題

経済学部長 徳井 丞次

卒業生の皆さんもご存じの通り、平成十六年（二〇〇四年）四月から信州大学の設置形態が変わり、国立大学法人法に基づき、国立大学法人信州大学が設置する大学となり現在に至っています。その根拠となる国立大学法人法は、その前年（平成十五年）に制定されています。分り易く言うと、国立大学法人は独立行政法人の一形態です。国立大学の独立行政法人化については、閣議決定によって平成十一年（一九九九年）から検討が開始されました。これは、それよりさらに前の橋本内閣時代に行われた行政改革によって公務員の大規模な削減方針が固まり、それを受けてその後様々な独立行政法人が誕生した政治の流れを受けたものです。しかしそれだけではなく、十八歳人口の減少や、国の厳しい財政事情を背景にして、日本の大学がもはや「成長産業」ではなくなくなったことが明らかにあり、大学自身のガバナンスの強化が求められるようになったからでしょう。

法人化前の国立大学は国立学校設置法に基づき設置された文部科学省の「現業部門」でしたが、法人化によってそれぞれの国立大学の経営責任がそれぞれに国立大学法人にあることが明瞭になりました。経営環境が悪くなった途端に、今まで様々経営に口出ししていた親会社から、「今後は自己責任で経営しなさい」と言われたようなもので、突然に経営責任を負わされた大学側も戸惑っているのが実情です。しかし、「成長産業」時代には、既存の事業もそのまま残しながら新事業部を立

ち上げて、社会の変化に対応していくことが可能でしたが、成長が止まった下では、変化への対応はスクラップ・アンド・ビルドによるしかないとなると、以前の国立大学の意思決定方法ではなかなか対応できないことも否定できません。

こうした大学の方向性を決めるような大きな経営責任だけでなく、それ以外の場面でも法人化前後との相違を思い知らされることは少なくありません。例えば、何か大学が関係するトラブルが発生し、大学側に損害賠償を求めめる裁判との係争となった場合にも、法人化前後では大きな違いがあります。法人化前の国立大学時代には、国家賠償裁判として、検察官が国の公務員として大学側の弁護に立ち、万一大学側の主張が通らずに相手方の損害賠償請求が認められた場合には、国の予算から損害賠償を支払うようになっていました。しかし、法人化後の現在ではこうした裁判を大学の予算から独自に弁護士を雇って争い、裁判に敗れて損害賠償を支払う場合にもそれは全て大学自身の負担になっています（つまり、そのために国から追加の予算をもらえない訳ではないので、大学の他の支出を削るしかなくなる訳です）。

つかの国立大学法人で職員の時間外労働への未払い問題が労働基準監督署から是正勧告を受けたことがニュースになったのを記憶の方もいると思いますが、そうしたことは今ではニュース・パブリックもなくなつて一々報道されませんが、他人ごとではないのです。こうしたことは、労働の機会費用を大学に意識付け、より効率的な仕事方法を追求させるという意味で長期的にはプラスの効果があると考えざるべきでしょうが、少なくとも短期的には大学経営の新たな負担となっている面も否めません。

このように国立大学法人としての経営責任が明瞭になったことを受けて、学長の権限が強くなり、また学長を補佐する理事等の職が新たに整備されました。現在の国立大学の学長は、大学としての教育機関のトップであると同時に、法人としての経営のトップ（私立大学の理事長に相当）でもあり、大変大きな権限を持つことになりました。このことは、法人化の前と後で、大学の運営組織を比較すると一目瞭然です。法人化前には、各学部長など（評議員を含む）学内の代表者から構成される評議会が大学内の意思決定機関として重要な位置づけを持っていました。これに対して法人化後は、それまでの評議会の機能が、大学の経営事項は経営協議会に、教育研究面は教育研究評議会にそれぞれ役割分担されることになりました。このうち教育研究評議会は従来の評議会と同じメンバーで構成されていますが、経営協議会の方は学長理事に、学外委員を加えたメンバーでの構成となり、従来の評議会の権限が弱められた形になりました。従来の評議会を通じた意思決定では、大学の意思決定が事実上は各学部の寄り合い所帯で行われるものとなつていて、学長のリーダーシップを揮いにくかつた訳

ですが、運営組織の変更がこうした状況を一変させたと思います。学長権限の強化は、学長の選出方法の変更によつても担保されています。法人化前の国立大学では、学長は学内の学長選挙で選出されてきました。これが、法人化後は、学内と学外の委員で構成される学長選考会議で選出されるようになりました。組織の多数の構成員の選挙で選ばれる人よりも、より少数の人から選出されるの方が、思い切つたリーダーシップを揮いやすいことは明らかでしょう。従来のように学長選挙で過半数の支持を得るには、数多くの人向けに「良い顔」をしなければならぬ訳ですが、新しい方法ではその必要が少なくなるからです。とは言うものの、信州大学を含むほとんど（約九割）の国立大学が、法人化前の学長選挙に代替する仕組みとして、ほぼ同様な形態で行われる意向投票を残しています。ただ、以前の学長選挙とは違つて、意向投票はあくまでも参事情報であり、学長選考会議での選出が効力を持つようになりました。その結果、幾つかの国立大学では、学長選考会議が意向投票の低位得票者を学長に選出して、そのなかには係争に繋がつていくところもあります。なお、学長選考会議は、学長の選出だけでなく、学長を罷免する権限も持ち、現在の国立大学の運営組織のなかで、強力な学長の権限を牽制するほぼ唯一の制度的な仕組みでもあります。

ところで正確に言うなら、学長選考会議が選出するのはあくまでも「学長候補」です。と言うのは、学長選考会議で選出された学長候補を法人が申し出て、文部科学大臣の任命を受けることになるからです。このように、法人として独立した経営責任を負うようになつたとは言つても、学長の任命を始めたとして、大学運営の重要事項につい

て事あるごとに文部科学省に「お伺いを立てる」必要があるのは、法人化前とほとんど変わりません。まあ、法人化前の国立大学時代から引き継いだ資産に当たる額の国からの出資を受け、毎年の主要収入である運営交付金の財布を握られている訳ですから、仕方ない訳ですが。そうは言つても、法人化前には当然のこととしてまったく意識されることすらなく行われていたことが、報告とか認可とかいつた手続きとして意識されるようになっただけでも進歩と言えなくもないでしょう。

法人化に伴つて増えた仕事を挙げるならその第一は、中期目標・中期計画の作成と、これに基づいて国立大学法人評価委員会が行う大学の評価があります。ここで「中期」の期間は六年間で、中期目標は、各国立大学法人の意見を聴いて文部科学大臣が定め、これに基づき各国立大学法人が中期計画を作成して文部科学大臣の認可を受けることになっています。中期目標の対象事項は共通に定められていますが、そのなかで各大学がどのような目標を立てそれを達成するための計画を置くかはかなり各大学の自主性に委ねられていて、中期目標期間の評価はこの目標の達成度で行われる仕組みです。ところが、大変残念なことに、第一期中期目標・中期計画（二〇〇四―二〇〇九年度）の開始時に、わが信州大学はこの「ゲームのルール」をまったく理解してなかった模様で、中期目標として二八〇を上回る膨大な数の項目を立てて、そのなかには茫漠たる内容のものや、達成が容易ではないハイレベルなものもあつたために、多数の未達成項目が生じてしまい、第一期の評価は低いと低いものになつてしまいました。このために「仕事が増えた」と最初に言つたのは、目標の達成に努力することもさることながら、毎年のよう

に關係書類作りに追われたことを指して... 以上のように、移行期特有の慣れな

いことの苦勞もあつて色々大変では... 最後の、以上読んでいただいて、十

分な想像力をお持ちの方なら、いま私... 辛い立場も辛抱が肝要と承知している



離学愛別の辞

渡邊 裕

私儀、本年三月末で信州大学教授定... (現在は、未だ、本学の理事職で、総

この間、経済学部創設、入試改革、... 大量受入れ、社会人大学院創設、経済

私の人生を顧みますと、一方で新潟... 同期生の多くが集団就職した経験から

前者軸から振り返りますと、私の教... 育・研究は、労働者の労働や生活のあ

わば古典的タイプの労働者像から、高... 度経済成長期以降の労働者像の新時代

後者軸から考えてみますと、当時の... 東大医学部(東大闘争の起点)が典型

信州大学経済学部創設期に加わった... 若手教員の多数は、この東大闘争を経

経済学部の諸改革が継続的に積み重ね... が必要だと思ひます。

られていきました。経済学部は、まさ... に大学改革の「梁山泊」と学内外から

経済学部同窓会理事会報告

毎年大幅減額を迫られています。これ... まで、辛うじて作り上げられてきた大

日時：平成22年5月22日(土)

午後1時より

場所：信州大学経済学部 研究会室

- 1 開会
2 同窓会長挨拶(矢口会長)
3 名誉会長挨拶(徳井経済学部長)
4 報告事項

- (1)21年度同窓会活動報告について
・前回理事会以降の活動内容につい

- (2)信州大学同窓会連合会活動報告につい

て矢口会長より報告。
◎会則に従ひ、矢口会長を議長に以下

- 5 協議事項
(1)終身会費の徴収状況について
・22年3月末現在、824名である

- ・今後も会員への依頼を重ね、徴収

平成21年度会計報告

Table with 3 columns: 収入の部 (Income), 支出の部 (Expenses), and 備考 (Remarks). Includes items like 前年度繰越金, 入会金, 役員改選, etc.

23,386,718 (収入合計) - 3,844,009 (支出合計) = 19,542,709

【次年度繰越金】 ¥19,542,709

(内訳は備考を参照)

Table with 2 columns: 備考 (Remarks) and 金額 (Amount). Includes items like 払込口座残高, 預貯金, 現金, etc.

平成21年度会計監査の結果、適正であると認めます。

平成22年 5月22日

監事 伊東一雄 監事 川田智弘

経済学部同窓会総会報告

日時：平成22年5月22日(土) 午後3時より
場所：信州大学経済学部 研究室
1 開会(大槻副会長)
2 会長挨拶(矢口会長)

3 名誉会長挨拶(徳井経済学部長)
4 議長選出(95K寺村英樹さん)
5 書記ならびに議事録署名名人の任命
6 書記に3K伊東一雄さん、議事録署名名人に3L松森幸一さん、12L

する必要性が提言され、徳井学部長より説明を受ける。今後同窓会において詳細確認する旨決定。
・役員改選について
・役員改選について
(3)同窓会設立30周年記念行事について

・平成24年3月19日に同窓会設立30周年を迎えるにあたり、記念行事の在り方について意見交換を実施。今後検討を重ねることを確認。
・議長退任
6 閉会(矢口会長)
◎午後2時30分に閉会となる。(会長)

高木保夫さんを任命

6 議事
(1)事業報告および会計報告の承認について
矢口会長より原案の報告・説明がなされ、川田監事より会計監査報告がなされた。
・質疑応答の後、特別の意義はなく、全員の拍手によって原案が承認された。
(2)予算および事業計画について
矢口会長より原案の説明がなされた。

【主な計画】

経済学部活動支援、学生表彰、同窓会報の発行・送付2回、理事会の開催、幹事会の開催、同窓会設立30周年記念行事の検討等
・終身会費の納入状況について説明がなされた。
3月末現在で824名の会員の方々の納入を確認。理事会にて納入方法の検討を重ねながら、今後も納入依頼を続けていくことを確認。
・質疑応答の後、特別の意義はなく、全員の拍手によって原案が承認された。

(3)役員選出について
・会則に従い、会長および会計監事を募るも、立候補者はなかった。
・会長より、会長ならびに川田監事の留任、90K澤柳信也さんを監事に選出の腹案が提示され、各人も了承したため、全員の拍手をもって承認された。

7 議長退任
8 閉会(栗澤副会長)
◎午後4時に閉会となる。(会長)

卒業生による講義—平成22年度

現代の産業・社会事情

教育企画委員会・交流系科目部会

古澤 栄一

同窓会員の皆様には日頃から本学在
校生のためにご尽力頂き感謝申し上げます。とりわけ就業行動科目の一つであるこの「現代の産業・社会事情」の開講につきましてもご理解とご協力を賜り、重ねて御礼申し上げます。
さて、少し過去を振り返り昨今の状況を伝えてみたいと思います。この科目も一九九三年に始まり今年で十七回目を迎え、延べ一八四名の卒業生に講義をして頂きました。中にはリピーターとして二回も三回も行った方々が十九名、さらに何と三回も行った方が一名居られ大きな力を頂き、在校生にとりましては言葉に表わせないほどの恩恵を頂戴しております。今更ながらに講師の方々には本番当日は勿論のこと、お忙しい日々の中にも関わらず後輩のために多くの時間を割きそご準備にあたられて頂いた事など、同窓会の皆様の後押しがあればこそ継続出来ていることに心より感謝する次第です。

生まれ、大いなるヒントを得られることはこの厳しい就職戦線に必ずや生き残れるチャンスと早めに獲得出来るきっかけとなっております。
また、この間講義を開催する時期についても変動があり、以前は七月から八月の夏休みにかけて集中講義形式であるいは一部平常授業とそれを組み合わせる形の時間帯で行ってまいりました。けれども、徐々に就職活動時期が早まるに連れ歩調を合わせるごとく、最近では六月から七月にかけての平常授業の時間帯に来て頂くことが多くなってまいりました。ですので、所属する企業様におかれましては中間期の難しい時期にも関わらず快く講師の方々に派遣して頂けることに對しまして大慶の至りであります。

そして、この講義は初期の頃からきつとどなたも一〇〇名を超える学生たちの前で教壇に立つことは恥ずかしさや難しさを考え躊躇されることかと存じます。が、皆さん快くお引き受け頂いていることは担当者としてとても有り難く、先般述べました通り最近の状況を踏まえ講師陣は八名×十名ほどに狭めさせて頂いておりますが、初期の頃十三×十四名のように枠が広がり多くの方々に来て頂ければ日々願っております。昨今の就職状況が厳しい中、さらに学生の能力を高め、どのように就職活動を支援していくかは学部教育の大きな課題であります。特に女子学生が増大する近年、女性の就職は男性に比べてもさらに厳しい状況です。ので今一層のご支援、ご鞭撻を得られれば有り難く存じます。



平成22(2010)年度 担当講師一覧 (敬称略)

氏名	入学年度	勤務先
粟澤 徹	1981	(有)西徳山荘
佐々木 千加子	1985	国立大学法人 信州大学
川田 智弘	1987	KOA(株)
澤柳 信也	1990	(株)八十二銀行
宮田 真輔	1996	三菱自動車工業(株)
北野 幸徳	1997	塩尻市役所
立川 修	1997	関東財務局 甲府財務事務所
佐竹 わか菜	2002	(株)新日本コンサルタント

本年度は、八名の卒業生に講義して頂きました(受講者は一五九名)。産業分類で言いますと国家公務員、地方公務員、宿泊業、コンサルティング、金融・銀行、製造業、情報関連の皆様であり、職業分類的には技術、開発、研究、事務、営業など、規模としては一部上場会社もしくは相当企業やその他の多種多様な面々でした(別表参照のこと)。

そのテーマも「ワーキングマザーの私ができるまで」、「様々な世界を眺めてみよう」、「公務員という仕事」、「NI-Xの企業理念」、「銀行員よもやま話」、「地方自治体職員のシゴトの流儀」(元気ある地域づくりを目指して)、「自動車業界の現状と今後」、「Jへかける山雅支え隊」など多岐にわたる、学生たちからは「非常に多くの分野で活躍しているのでびっくり」、「会社側が求めている人間像を知った」、「学生

時代のコミュニケーション作りが重要」、「自分自身を強く表現することの大切さ」、「まずは行動」などなど学び大いなる刺激を受け、きっと社会人たる人材に必要な心構えと姿勢を早くから身につけ行動できるようになることと存じます。

皆さん、この講義に関しては今回が初めてのご登壇でしたが、同窓会報には何度も寄稿されたり理事会メンバーとして同窓会を支えている方々(粟澤副会長、澤柳監事、川田監事)も居られ頼もしい限りであり、この場をお借りし各位に御礼申し上げます。

このように今後も本学部は社会人の大学教育への参加を重視してまいりますので、引き続き同窓会の皆様にご協力願えれば幸いです。

ゼミ「今」

—後輩達のゼミ紹介—

村上ゼミ

小宮山 惇

連載



村上ゼミは他のゼミとは一線を画しております。毎週金曜日にゼミを行っているのですが、五時限目が始まる前は、多くの学生が何やら重そうな荷物を持って経済棟へ入っていくのです。村上ゼミは、総勢十九名がパソコンを各自が持ち込んで、ゲーム理論の問題をコンピュータ・プログラミングを

用いて解くことを最終的な目標としています。ゲーム理論とは、互いに利益が対立するかもしれない複数の人間(プレイヤー)が、自分の利益を最大化するにはどのように行動したら良いかを研究するものですが、その問題をコンピュータに解かせるため、Javaを用いてプログラムを開発します。このプログラムにより、人間が解くより正確で素早く解が得られます。

プログラム完成の為に、上級生と下級生が一つのチームとなり、上級生が下級生を指導しながら、村上先生から出される課題を協力してこなしていきます。また、チーム内で分らないければ他のチームと協力し、みんなで意見を出しあいながら試行錯誤を繰り返しています。このようにゼミ室は多くの声飛び交うため、誰もが発言しやすい環境があります。

さらに、コミュニケーションを深める行事として、前期と後期の終わりに飲み会が開かれます。このような場で、村上先生をはじめとして、先輩や後輩との交流も深められたと思います。

ゼミでパソコンを持ち込むこと。そして、コンピュータ・プログラミングの習

得、この二つを研究テーマに挙げていくことも他のゼミとは一線を画している理由です。一線を画しているということとは、注目されていることではないかと私は思います。村上ゼミで身につけた知識やコミュニケーション能力を発揮し、学生生活の中はもちろん、ゼミを卒業し社会にでてからも多くの先輩方に負けないぐらい、ゼミ生のみならず注目される人材となるよう、村上ゼミでは日々からを養っています。

二〇一〇年度の古澤ゼミのゼミ長の瀧川耕平です。古澤ゼミに入ってから古澤先生のもとで指導を受け早くも一年が過ぎ、三年生となった今年度はゼミ長として一年を迎えることになりました。今回は同窓会報ということで、信州大学経済学部、また古澤ゼミOBの皆様に向けてゼミの状況をお伝えするわけですが、ゼミでは毎週どのようなことを行っているのかと言ったことを去年のこともふまえて古澤ゼミの近況をお伝えしたいと思います。

今年度のゼミは七名の新入生を迎え、私たちの学年と古澤先生と合わせた十二名で毎週スポーツやデイベートをしています。二年生が五人、三年生が四人、三年次編入の編入生が一人、すでに就職が決まっている四年生が一人と学年もバラバラで人数的にも多いとは言えませんが、ゼミ生が皆で頭を使い自分たちの考えを出し合ってスポーツをしています。人数が少ないからといってやらないのではなく、工夫することで規定の人数でなくてもやってみたり、私が二年生のときには古澤ゼミ出身の四年生の方々に来てもらい一

緒にスポーツをやらせてもらうこともありました。またゼミ生の中には女の子もいるので専用ルールを設けたり、中国からの留学生でスポーツのルールが分からないので皆で教えたりもしています。他のゼミと掛け持ちで古澤ゼミを取っている人もいて、ゼミを二つとなると大変に聞こえますが掛け持ちしている人たちは皆どちらのゼミも熱心に取り組んでいます。

また現在のスポーツに関わる社会問題で気になるものについて月に一回か二回程度のデイベートも行っています。デイベートはそれぞれの議題について四人程度にチームを作り賛成派と反対派、また審判・司会という役割も作り討論をしています。

今年の前期は「ワールドカップで日本代表は予選リーグを勝ち進めるか否か」や「高校生の奨学生制度(県外から選手を集めたり、県内の有望選手が県外に流出する等)について」などについてデイベートをして熱の入った討論をすることができました。後期も前期に引き続きデイベートを行い、よりディスカッションの能力を高めそれぞれの実力を高めていき就職活動等に繋がっていきたく思っています。また試合のビデオを見て特定のチームがなぜ



また現在のスポーツに関わる社会問題で気になるものについて月に一回か二回程度のデイベートも行っています。デイベートはそれぞれの議題について四人程度にチームを作り賛成派と反対派、また審判・司会という役割も作り討論をしています。

今年の前期は「ワールドカップで日本代表は予選リーグを勝ち進めるか否か」や「高校生の奨学生制度(県外から選手を集めたり、県内の有望選手が県外に流出する等)について」などについてデイベートをして熱の入った討論をすることができました。後期も前期に引き続きデイベートを行い、よりディスカッションの能力を高めそれぞれの実力を高めていき就職活動等に繋がっていきたく思っています。また試合のビデオを見て特定のチームがなぜ

また現在のスポーツに関わる社会問題で気になるものについて月に一回か二回程度のデイベートも行っています。デイベートはそれぞれの議題について四人程度にチームを作り賛成派と反対派、また審判・司会という役割も作り討論をしています。

今年の前期は「ワールドカップで日本代表は予選リーグを勝ち進めるか否か」や「高校生の奨学生制度(県外から選手を集めたり、県内の有望選手が県外に流出する等)について」などについてデイベートをして熱の入った討論をすることができました。後期も前期に引き続きデイベートを行い、よりディスカッションの能力を高めそれぞれの実力を高めていき就職活動等に繋がっていきたく思っています。また試合のビデオを見て特定のチームがなぜ

負けたか、なぜ勝ったか等を個人で試合を見ながら考察しまとめるということを行いました。初めてのことを行ったので上手くいかなかった点もありましたが、次回にはその修正点をふまえてよりよくしていきたいと思えます。

また今年は都合によりいけませんでしたが、昨年度はゼミ合宿で実際に生で試合を見るということでプロ野球の試合を観戦に行きました。やはりテレビで見ると自分の目で見る試合は迫力が違いました。試合に出ていた選手だけでなく、チームを応援するサポーター、試合の流れを変えるような采配をした監督やコーチ陣、球場内の売

会員のたより

我が誇り

玉田美治先生

伊東 信行

(1970年入学)

八月は、というか八月ばかりは、故人を偲ぶ。とりわけ、この八月は、痛いほど故人を思うことになった。

恩師、玉田美治先生が食道ガンのため四十七歳の若さでお亡くなりになったのが、一九八〇年六月で、早三十年の年月が経ってしまった。訃報に接するのが遅れ、ご葬儀に駆け付けることができず、ご仏前で、奥様から最後に至る経緯をお伺いし、滴る汗と共に、悔し涙を止めることができなかったことを、今も鮮明に覚えている。

玉田先生に出会ったのは、大学二年生になって旭町の教養キャンパスから県の森の人文学部に移り、経済原論の講義を受けたのが最初である。宇野弘

店で働く人たちが等を見て一つのチームが成り立つ様子やそれを支えている人たち、プロスポーツチームが社会に与える経済効果を目の当たりにすることができいい経験となりました。

こういった毎週のゼミや合宿を通して、古澤ゼミは活動しています。今年度のゼミも後期を残すだけです。古澤先生のもとで貴重な指導を受け、自分たちの個人の能力を高めていきたいと思えます。そしてOBの先輩方に負けないように、古澤ゼミを盛り上げていき、今の後輩たちに来年も良い雰囲気引き継いでもらえたらと考えています。

焦燥感の裏返しで、ゼミでは結構、跳ね上がった発言をし、玉田先生を再三、挑発した。それを沈着冷静に受け止め、両切りピースを煽らせながら、やさしく往なしてくれた。それもそのはず、六〇年安保の際、東大大学院生だった玉田先生は、学生のデモ隊が右翼や警官隊の挑発に乗らないよう自制を促す役割を務めていたと、ご本人からお聞きした記憶がある。

お酒も何度と無く、ご馳走になった。裏町や天神辺りで飲んでも、最後は官舎のご自宅で飲み直すことが多かった。遠慮を知らない学生だったので、ある日曜日の午後、テレビでルキノ・ヴィスコンティ監督の「異邦人」(カミュ原作)の放映があるのを知って、突然、ご自宅にお邪魔して拝見させていただいたこともある。玉田先生はもとより、いつも温かく迎えてくれた奥様に感謝、感謝である。

蔵の「経済原論」が教本で、安易に経済学科を選択したことを反省したほど、格調の高過ぎる講義であった。それでも、文字通り名が体を表すほどの風貌と、凛とした語り口で、まるで言葉の意味も分らず酔いしれるイタリアオペラのARIAを聴いている心地すすらし。故に、ゼミの選択も迷わず玉田ゼミとした。その玉田ゼミで最初に課せられたのが、ホブソンの「帝国主義論」の原書購読。玉田先生が抜粋コピーしたものが、英語力の無い身には応えなかった。玉田先生が「アメリカ国家独占資本主義」を担当、執筆した大内力編「現代資本主義の運命」に教材が移ったときには、ほっとすらし。考えてみれば、原理論・段階論・現状分析と宇野経済学の三段階論を踏襲するがごとくの課題設定だったのかもしれない。

小生が入学したのが一九七〇年で、すでに全共同運動は下り坂。全共同に憧れていたものの、それに乗り遅れた

経済論集第十八号に伊藤喜雄先生が「故玉田美治教授抄」として記されておられる。

玉田先生を早く失った悔しさは、小生にとって仕事のバネになった。日本経済新聞記者として、東京証券取引所大蔵省(現・財務省)、日本銀行と担当部署をわたり、根柢なき熱狂の最中、ニューヨーク駐在の経験もすることになった。日米円・ドル委員会を起爆剤に、日本の金融・証券市場の対外開放と共に、金融・証券自由化の波が怒涛のように押し寄せ、プラザ合意を起爆剤に、バブル経済が急膨張し、そして崩壊に向かう渦中に身を置いた。しかも、二〇〇〇年から二年間、格付投資情報センター(R&I)に出向し、ストラクチャード・ファイナンス部長として日本の証券化市場の勃興期を垣間見ることができた。玉田先生がご存命であれば、「現状分析」で激論を戦わすことになったに違いない。それは小生が彼岸に行ったときの楽しみでもある。此岸では、玉田先生に何の恩返しもできなかった。苦難の長きを経て、玉田先生の遺稿は「フランス資本主義 戦間期の研究」(桜井書店)として二〇〇六年九月ようやく刊行されたが、その紹介を日本経済新聞日曜版の読書欄で短評でしか掲載できなかった。

最後に、紙幅をお借りして、個人的なことに言及するのをお許しいただきたい。この八月十五日、人文学部の同級生で、文学科東洋史専攻だった塚本俊一君を玉田先生と同じ食道ガンで失ってしまった。同級生の死に打ちのめされたのは、文学科西洋史専攻の旧姓・大月則子。我が妻を六年前に失って以来のことだ。



八ヶ岳自然と 森の学校だより

高木 保夫

(1977年入学)

さる九月十七、十八日に、「キノコと樹木、トレッキング」が開講されました。講師は長野県林業大学校の大木正夫先生です。茅野駅には、浦野栄作さんが笑顔で、一行を迎えてくださいました。栄作さんは、現在ご子息岳孝(タカユキ)さんに事業を継承されていますが、一九八九年の初回以来連続して森の学校を開講される八ヶ岳の名物小屋主です。参加者は大阪、首都圏、地元から総勢十三名ありました。

さっそく茅野市の角名川沿い、山の神周辺、桜平周辺でキノコ採りをしました。大木先生は、沢筋をどろんどろん歩かれます。八十歳になっても、通称「オオキダマ」は健脚です。鎌に釣竿をとりつけて伸びる道具で、木の上のキノコをえぐり獲ります。沢歩きでのキノコ採りをしてみて、事前案内に「キノコ採りは長靴をお持ちでもかまいません」とあった意味がよくわかりました。

各人が収穫したキノコを、この日泊まる夏沢鉱泉で仕分けしました。仕分け人は、大木先生と浦野栄作さん。

食べられるキノコは、種類ごとにバットに仕分けして名前をふりました。サマツ、ムラサキシメジ、ヌメリシメジ、キシメジ、ハナイグチ、ベニハナイグチ、ヤナギタケ、ヒラタケ、ブナハリタケ、ホウキタケ、ネズミタケ、ウシビタイ、アシングロタケ、天然ナメコ、アメリカシギタケモドキ、キツネタケがありました。仕分け人は「疑わしきは食べず、やめとけやめとけ」と選別をすすめました。食べられないキノコは、再度山へ返しました。大豊作と



はいえませんが、いろいろなキノコを、大根おろし、酢あえや味噌汁で頂戴しました。加えてしし鍋や、栄作さんからの振る舞い酒。久子夫人からは自家菜園のかぼちゃ、なす、夕顔の料理を食卓に並べてのおもてなしをうけ、一同舌鼓をうちました。

夜の講義では、活物寄生と死物寄生のちがいが、マツタケを栽培する方法、ベニテングダケの幻覚作用を察知して使うロシア民族の話、猟師が獲った食べられる大型動物はみんなシシと呼ぶこと、農地を守るお使いがニホンオオカミであったこと、サルを獲るイヌワシのこと、カムチャッカ再訪計画同行への誘いなど、大木先生の話は尽きませんでした。

翌朝は、荷物をおいて根石岳ヘッドで入念なウォーミングアップをして、六時半出発。オオシラビソとトウヒの見分け方、ヒラタケが枯らした樹木の様子、カモシカの食べたトリカブトの花、かか木が摩擦で発火し森林火災の原因になること、台風による倒木でできた森の空白地帯によって林の下へ強い風が入り葉の水分を持っていかれ、枝に水分がなくなる編枯れ現象のメカニズムなどフィールドでの講義をうけながら、オーレン小屋経由で、

根石山荘へと向かいました。

大木先生は、山歩きは一人が一番おもしろいと話されました。一人黙行すると、どこにながらいるか分かる。なるべく音を立てずに歩く。音をだして相手の音が消えてしまったらアウト。耳が聞こえなくなったら、もう山はやめると話されました。こうして、何十年もにわたる全国各地での黙行によって蓄えた「大木森林生態学」の集積知を、森の学校で腹藏なく披露し、次代に伝えてくださっています。見えないものにつないでくださる大木先生の「岳恩」に、心から感謝いたします。

コマクサが咲く根石山荘では、現在緊急避難施設とトイレ水洗化の工事中でした。岳孝さんによると、環境省の補助を受け、ヘリコプターで荷揚げをし、十一月完成予定だそうです。根石岳山頂（二六〇三メートル）からは、諏訪湖を遠望することができました。この山の一滴もいつかは諏訪湖へ注ぎ込み、天竜川から遠州灘へつながっているのだと実感しました。

その後、一同無事に下山しました。閉校式のあとも大木先生と歓談したり、昨夜に続いて夏沢鉱泉で汗を流したり、お土産のキノコを分別したりそれぞれにすみました。一同満足感と心地よい疲れを持って、八ヶ岳を後にしました。

大木先生は公民館長で忙しい中、『わが町の雑草図譜』を上梓されました。各頁に一草ずつが綿密にスケッチされ、春夏秋冬、花の咲く時期ごとに一五〇種余が解説整理されています。巻頭には、二十世紀初めには、身の回りにこんな植物があったということを残すことが目的と記されています。

国民森林会議が教育森林を提言し、八ヶ岳で事業を立ち上げたのは、一九八九年八月でした。会長は、信州大学の初代経済学部長もおつとめいただいた

た開谷三喜男先生でした。二代会長も経済学部でゼミの教授をしていたのだ大内力先生でした。そんなご縁で八ヶ岳自然と森の学校に初回から参加いたしました。一年後輩の山梨県庁の手塚伸さんに一緒にいただきました。教育森林の主査は柴田敏隆会員と故松澤議員。初回の麦草ヒュッテと白駒荘・根石山荘・オーレン小屋での三泊四日から、もう二十一年になります。松澤会員は、「この集まりを良くしていただく、仲間を誘っていただく、そして子どもたちに伝えていく」と学校の趣旨を語られました。週休二日制、総合学習、インタープリターのストックなどと外的な変化はありましたが、教育森林に情熱を注がれた先輩各位のおもいが、八ヶ岳でリレーされることを願って止みません。

信州大学のOB各位が、「八ヶ岳自然と森の学校」にふるつての御参画を、心からお待ちしております。

【問い合わせ先】 高木保夫
takagi.ya@po2.1vc.ne.jp
(1980年入学)

二つの街の狭間で

笠井 雅人

(1980年入学)

同級生でも同期生でも、その中に見や雰囲気ごとくなく自分似ている人間がいれば、何かと気になるものである。たとえ親しく言葉を交わしたことがない間柄であっても、その去就や動向がどうも気になり、やがて彼我における本質の違いに関心が及んでいくのは、自然の流れではないだろうか。

甲府在任の私にとって、松本の街はそんな「気になる他人」のような存在である。

人口二十万程度の、都市と呼ぶにはいくぶんコンパクトな街。周囲を山に囲まれた盆地であり、西側には三千メートル級の「日本アルプス」が壁のように立ちはだかる。出自が戦国期に形成された城下町で、古くからの温泉郷もある。豊かな自然と周辺にある著名な景勝地を求めて、都会から観光客が多数訪れる観光地としての顔も持つ。そしてこの街に本部を置く、国立大学がある。：このように書けば、同窓生諸氏は懐かしい松本の街を連想されるであろうが、実はそれほどではない。以上は、私が生まれ育ち、恐らくは生涯を全うする地となるであろう山梨県甲府市の特徴でもあるのだ。

松本と甲府は、このように表面的にはよく似ている。

信大の受験のために初めて松本の駅前前に降り立ったのは、ちょうど三十年前。すでに近代的に整備されていた駅前は、ビルが立ち並ぶ整然とした佇まいで、きれいな街だとの第一印象を持ったが、松電のバスに揺られて眺めた、城下町の常としての一方通行の多い入り組んだ道路や、新旧の街並みが見交差する様子に、甲府との類似点を見出して親近感を覚えた。やがて縁あって移り住んだ松本は、豊かな自然に彩られた情緒溢れる文化都市で、受験前に聞いていた日本一の教育県であるとの評判に合致するかのよう、市の中心部に大型書店が多く、ともあれ旧制松本高校の系譜に連なった身として有難く日参した。一方でこの街を取り囲む自然の見事さ、たとえば美ヶ原溶岩台地のスケールの大きさに驚嘆し、清流の里安曇野の、北アルプスを背景にして大切に受け継がれてきた田園風景の荘厳な美しさに陶然となった。そういう豊かな自然探訪の足掛かりとなつたのは、キャンパスからさほど遠くない位置にあるアルプス公園。中学のころからバードウォッチングを趣味にし

ていた私が、信大入學と同時に入会した自然科学研究会の仲間たちと、何度となく訪ねた場所なのだが、なだらかな近感の一部は、次第に戸惑いへと変わっていった。

同じように山の都を標榜する、一見似ているような街であっても、甲府は街としての品格にも情趣にも乏しい。反面、実利的な甲州人が解き放つ猥雑な活気があり、当時の松本の街からはあまり感じ取れなかつた柄の悪いエネルギーが満ちていた。まだ若かつた私は、そういう生まれ故郷の雰囲気は少しほつとした面もあったのだが、三十年を経た今日、無節操な高層マンションが林立する一方で、郊外型の大型ショッピングモールに客足を奪われてシャッター街化した甲府の中心市街地を見るにつけ、原石のようなポテンシャルをうまく生かし、魅力あるソフト事業の展開でますます品格ある山岳都市へと発展し続ける松本の街と、それを支える折り目正しい住民たちに、大きく水をあげられたとの思いを強くしている。

その昔、都会のインフラ整備の一翼を担った甲州財閥のように、山国甲州からは進取の気性に富んだ逸材が輩出されることがある一方で、先祖伝来の地を離れずに、濃密な人間関係に辟易しながらも相互扶助としてとことん利用しながら生涯を全うする人々がいる。圧倒的多数は後者が、特段非凡な才能も度胸もない私は、生まれ故郷の庇護下で生きる道を選んでも今も甲府の実家に住む。しかし僅か百キロ離れた地に、第二の故郷で、「気になる他人」のような松本の街がある。この街に同化するとはできなくても、この街と母校信大に常に畏敬と憧憬の秋波を送りながら、一見似ているようであつた本質の違う街で、生きていくのに汲々としているのである。

祝いを申し上げるとともに、同窓会事務局の皆様方に、私の寄稿文の掲載をお許しただけのことへの感謝を申し上げます。

さてさて、私の大学時代の思い出……であります。まず大学に入ってしまったことは「キャンパスから遊びやバイトに行くのに自家用車がないと不便！」というものでした。そこで、入学後の第一目標を「運転免許取得」に定め、約二ヶ月でその目標は達成することができました。

しかし、その次の目標を設定することがなかなかできないまま期間が過ぎていってしまい、結果、大学生活四年間のほとんどはバイトと勉強と趣味のボウリングに明け暮れていたように思います。バイトは家庭教師と松本市内の某進学塾で働いていましたが、当時二浪していた私は、家族からの仕送りがなかったため、学費とおこづかいを稼ぐために頑張って働いていた記憶があります。

かといって、大学での勉強も疎かにしていたつもりはありません。授業中教授の一言一言をすべてメモするような形でノートに書き殴っていました。当時テープレコーダーが買えなかったので、内容を書き写すのに必死だったことを覚えています。

また、そのノートをたまたま授業を欠席した仲の良い同期にコピーして渡したところ、テスト直前に一斉に同じ授業を受けている仲間にもコピーが回り、みんな良い評価をもらったにも関わらず「ありがたう」の一言で片付けられてしまった苦い思い出もあります（まあ、ある意味人助けできてよかったのかもしれないが……）。

次に、就職活動の事ですが、当時私が目指していたのはアナウンサーと公務員でした……一見相対しているような業種にも思えますが、その時には自

分の身近な生活をよくしていくためにはどうしたらよいか、またみんなの役に立つためにはどうしたらよいか、その情報をどのように伝えていくかということをするごく真面目に考えておりました。他の業種についてももちろん試験は受けていたのですが、結果私は現在、希望の一つであった公務員（長野県職員）として働いております。

これは、ゼミが「行政法」の又坂先生のところでしたし、公務員試験の基礎をしっかりと学ばせていただいた結果であると感謝をしています。

さて、大学はよく自由の場で、青春を謳歌できる場所であるといわれています。ただ、いろんな環境により、それを充実できないまま四年間（最大だと八年間ですか……）を過ぎてしまいう方もいると聞いています。また、社会人になれば、上司、部下の関係で悩んだり、何事も自分の思うようにうまくいかないことも出てきます。あるいは、自分でうまくいっていると思っていたことが、結果的に誤っていて、他の人たちに迷惑をかけることもあるかと思えます。でも、それはすべて自分の経験となり、必ずいつか別の機会に役に立つ時期があると思います。

私が常に考えていることは、「今を有意義に過ごすにはどうしたらよいか？」ということ。人それぞれ考え方が違うので、押し付けをするつもりはありませんが、いろんな失敗や経験ができるのも、今この時だけです……

みなさんも、是非有意義な生活を送りください。以上私の思いを述べさせていただきました。乱筆乱文お許しください。



十数年を振り返って

市川 洋平

(1995年入学)

在学時に所属していましたゼミの野地孝一先生が同窓会の担当をされておられ、私の名前を挙げられたとのことで事務局の方より寄稿文のご依頼をいただきました。不出来な学生を覚えていたつしやつたとともに、卒業後一度も先生のお顔を拝見することもなく、大変恐縮しております。

私の入学は、一九九五年四月で、ちょうど経済学部経済システム法学科が新設されたときでしたので、第一期生ということになります。元々、幅広く学びたいという気持ちがありましたので、経済学科との選択の中でこちらの学科を選びました。一年目は浅間温泉にあった「浅間ハイツ」で四畳半の一室に住み、また、今では考えられませんが、朝食抜きで毎日銭湯通いの生活でした。当時は、同じ出身校と田中聖先生のゼミで知り合った友人を中心に色々なことをしていました。バイトもしていなかったはずですが、正直、何をしていたかあまり記憶がありません。一番憶えているといえば、とても恥ずかしいことですが二年に進級するの単位がボーダーラインすれすれだったことです。

二・三年になってからは沢村のアパートに引っ越し、家の近くのスーパーでバイトを始めるとともに、野地先生がゼミに属することになり、仲間が増え、何となく学生生活らしくなってきました。この年以降は、野地ゼミに属していた同年代の仲間と、深夜に思いつきで海へ出発するなど（後で友人に大変迷惑をかけてしまいました……）、思いついたことを手当たり次第にしていた頃です。些細なことから人生の岐

路に立つようなことまで色々な思い出があり、勉強についても、周りの友人やゼミの先輩方の話を聞いたりして焦り、がんばって講義を受けた時期だったと記憶しています。

四年目は、就職活動の最中であつたはずですが、地元佐久市役所への就職を希望していたので、受験勉強をしていたため、あまり気持ちに余裕もなかったように思います。

続いて、大学卒業後、四月に佐久市役所に就職しましたが、四月一日から佐久消防署勤務の辞令をいただき、わずか一週間くらいで長野県消防学校に入校し、消防・救急・救助業務の基礎を学びました（今でもたまに、学校生活の夢を見ます）。消防で二年在籍後、次は教育委員会事務局の学校教育課へ異動となり、小中学校の施設や備品の整備に携わりました。消防署でも幾らかは事務をしていたものの、基本からやり直しました。そこでまた二年在籍し、次は市長部局に異動し、総務部取税課に異動となり、主に法人と佐久市外の納税義務者の滞納整理の担当となりました。ここでは、地方税法や国税徴収法など関連する分野であり、差し押さえの執行も経験するなど、四年間在籍しました。次に、現在の部署である市立の浅間総合病院の事務部総務課に配属されて病院職員の人事に関する事務を担当し、今年で四年目になります。病院は、行政職だけの中にいた今までと違い、医師、看護師をはじめとする多職種の医療従事者で構成されており、下手すると行政以上にセクシヨナリズムが発生しそうですが、院内における諸問題ごとに委員会を設置して職種間のコミュニケーションを円滑にし、セクシヨナリズムの防止に役立っているのではないかと思います。事務職（ここでは行政職とは呼ばれません）も例外でなく、私も感染防止委員会に属し

ています。ヒラが委員会に出席して意見を物申すことは、病院に来るまでではまれであつたと思いますので、そんなところが職員がいきいきと働いている要因なのかなと思います。現在、佐久市の主要施策である「世界最高健康都市の構築」のため、地域医療の充実が重要課題となっているなか、院内で働きながら、この先どうなっていくのだろうと気になっているところです。ついですが、佐久市役所には私の知る限りは同じ学部出身の人は全くいません。是非、後輩の方の当市への就職をお待ちしております。

こうして約十年働いてみて、学生時代の経験が少なからず、役に立っていると感じることが多いです。そんな話講義で聞いたことがあるというぐらいのことが、物事の理解の助けになっています。現在でも、機会さえあればもっと知識を吸収し、業務に役立てたいと思つていますが、やはり若くて時間がある学生時代にもっと学んでおけばと後悔しています。

現在、大学との関わりは、直接はありませんが、学生のときに同じゼミにいた同年代の友人たちとは、毎年一回浅間温泉を拠点とし、私が万年幹事に近い感じでOB会みたいなものを開いています。それが現状報告（ちなみに、私事ですが、同じ職場の保健師と結婚し、八歳を頭に三姉妹の父親として、にぎやかな家庭生活を送っています）や、昔話をしたりと楽しく時間を過ごしています。

最後に、同窓会を維持いただいている関係者の皆様に感謝いたしますとともに、同窓生の皆様のご活躍をご祈念申し上げます。



文理学部卒業生からのたより

回想

青木 功

(文理学部社会科学科1963年卒業)

信州松本のヒマラヤ杉に囲まれた「あがたの森」の校舎を卒業し、故郷安曇野を離れ、はや半世紀になる。筑摩の地もさることながら、旧制高等学校記念館となった木造校舎も、遠い若き頃の思い出の場所となっている。

今、住んでいる尾張名古屋で晴日朝久にならぬように、若き日の感傷に浸りながら古い資料をめくっていると、当時の信大文理受験票、入学志願者募集要項(小生入学の社会科学科は募集人員二十名とある)、合格通知書、入学許可書、更には入学料金千円・授業料前期分四千五百円を納入せよという入学者心得等が出てきた。中には、信大文理学生会主催の「新入生歓迎のためのうたとおどりの会」の謄写印刷プログラム(昭和三十三年

四月十九日(土)午後六時~九時文理学部体育館)もある。その呼びかけにはこう書かれている。「もぐらも蛙も、山おくの熊も、長い冬ごもりからさめてもぞもぞと春の息吹をかいでいます。ぼくらはふとんの中にもぐったまま先のみえない世の中をかこつてなどいないでジャンを踊りてと腕を組んで楽しくうたいましょう」(原文のまま)とあり、うたは、「ともしび」「川岸のベンチ」「広きドニエブルの嵐」「行商人」等々、おどりは「ゴロブチカ」「ゼブンステップ」「メキシカンワルツ」等々となっている。懐かしい当時の歌声喫茶、初めて公然と女性の手を握ることができたフォークダンスを思い出す。

信州大学東京同窓会の開催について

信州大学東京同窓会が文理学部の諸先輩方により毎年開催されています。ご都合がつかれます方は、是非ご参加下さい。

信州大学経済学部同窓会 会長 矢口晋司

記

日時 平成23年2月5日(土) 午後2時30分より
場所 東京都千代田区 アルカディア市ヶ谷 (03-3261-9921)
内容 (1) 講演会 「生殖医療の現場から」 根津八紘 (信州大学医学部卒)
 諮訪マタニティークリニック院長
(2) 大学本部からの報告
(3) 総会
懇親会 講演会等終了後。会費制(男性1万円・女性6千円)。
その他 記念講演および懇親会ご出席の方は、同窓会事務局までメールまたは電話(火、木の10時~15時)でお知らせください。

広報誌『信大NOW』のご案内

信州大学のニュースや教育・研究内容などを掲載する広報誌です。信州大学WEBサイトからもご覧いただけますが、冊子をご希望の方は同封の定期購読をご利用下さい。



また、セピア色になった懐かしいものも出てきた。文理学部卒業式の卒業生代表答辞の原稿だ。(於昭和三十八年三月十四日文理講堂)
卒業年のある日突然ゼミで指導を受けていた赤羽豊二郎教授から「学部卒業式に卒業生代表で答辞を読むように」と下命があり、その時の答辞原稿だ。原稿用紙三枚のもの、表紙に学校検閲の決済印が押してある。学部長・中山、厚生補導委員一両角、宮地、事務長一栗本、倉持(あと一人は詠めない) 厚生補導係長一両瀬
原稿の一部を抜粋すると
「……月日は百代の過客とか、内に外に混乱せる現下の世界情勢の中にこれから生きていかねばならない私達にとって、日々の生活が単なる歴史のくり返しであってはならないと思えます。あらゆることに責任を持ち、能動的に活動し、常に進歩を目指さなければならぬでしょうし、またそれが私達に課せられた社会的責任でもありましよう。……」
今、読み返すと面映くなる文章であるが、最近の政治の乱れ、経済の混乱、社会環境の悪化等を考えると四十七年前の「内に外に混乱せる現下の情勢」云々の言葉は今を予測した言葉ではなかったか。
齢七十にして懐かしき学舎を思い、同窓諸兄の身を案じつつこの回想文をしたためた。

編集後記

本同窓会報は、今回で第一〇号である。第一号(創刊号)が二〇〇五年一月三日(文化の日)の発行だから、まる六年となる。年二回の発行は無理かもしれないと思っていたが、そうではなかった。玉稿をお寄せくださった会員や特別会員(教員)の皆様のご尽力の賜である。厚く御礼申し上げます。

この間、時代は大きく変化した。二〇〇五年は小泉政権(二〇〇一年四月~〇六年九月)の末期であった。それから安倍(〇六年九月~〇七年九月)、福田(〇七年九月~〇八年九月)、麻生(〇八年九月~〇九年九月)と各々ほぼ一年の自民党主導短命政権が並び、ついで民主党主導の鳩山政権(〇九年九月~一〇年六月)が生まれたが、これまた一層短命であった。管政権(一〇年六月~)の寿命はわからないが、自民党主導から民主党主導への歴史的な政権交代をみたのである。

経済面では、〇八年秋にリーマン・ショックを契機に世界金融恐慌が発生し、世界不況のなかで、各国一斉に、それまでの新自由主義的政策からケインズの政策への転換が図られた。しかし、このケインズの政策は、ヨーロッパではギリシャを始め各国の財政危機を招き、そこから欧州金融危機を発生させ、アメリカでは容易に効果を生まざり、オバマ政権の「チェンジ」を困難にしておき、日本でも財政危機を加重している。世界は政策的に手詰まりの状況にある。

そうしたなかで、中国やインドなど新興国の台頭があり、国際競争が激化し、為替戦争や新重商主義ともいわれる事態が現出している。

グローバルゼーションは、新たな局面に入っている。会員諸氏は、それぞれの現場において、最近の世界と日本をどうみておられるであろうか。

(事務局)